

「児童相談の現場を通して家族・子育てを考える」

—漫画『誰の虐待?』、『さあ、もういっぺん』（団士郎作）を題材として—

宮井 研治（京都橘大学健康科学部）

今日は、家族・子育てをテーマにして話を進めていこうと思います。私は、長らく公務員として児童相談の現場にいたのでそれも加味していこうと思います。ただ、ぼーっと私見をお話していても仕方ないので、団士郎さんという方の漫画作品を考える材料として使わせていただこうと思います。材料という言い方はおこがましくもあり、漫画自体を観ていただくだけで十分ではあります。しかし、それでは私のお仕事になりませんので、私の話もくつつけさせていただきます。団士郎さんは、家族システム論というものを基盤にして、家族を考え、心理臨床家として長年、児童相談、家族支援をしてきた人です。一方で、家族、組織、社会といったものをテーマにした漫画作品（「家族の練習問題-木陰の物語」シリーズ①～⑦ 出版社 ホンブロック）などを手掛けてきた人です。

なぜ子育てがテーマなのか。今日お集まりいただいた方の中には、お仕事として子育て支援をされている方、また実際ご自身が子育ての最中の方がおられるように見受けられます。土曜日の朝早くから来られている皆さんは、子育てについて一生懸命考えておられる方たちだと勝手に想定しております。親が子どもを育てるのは当たり前と言ってしまうのは身も蓋もないわけですが、硬い言葉で言えば次世代を担う人達を作っていくということです。単純に次世代が育たなければ、人類立ちいなくなります。有り体に言うと、ちゃんと税金を収めて自立してやっていける人を育てていかないと、私や、皆さん、その先の人たちの老後が危ういという事になってくると思います。

ではなぜ、家族なのかということですが、「家族」というシステムの是非については「人類」を語ると同じぐらい長いこと語られてきています。家族への批判と擁護、今日はそのどちらにも与するわけではありません。最近の海外の本で「毒

親」という題名の本がありました。なかなか衝撃的なネーミングです。見方によると、立場によると、子どもにとって親はそういう存在にも見えてしまうということなのでしょう。ただ、私には家族が良いとか悪いとか、家族は素晴らしいものであるとか、或いは、家族の方向性を変えて解体して、違うものを作っていけないといけなとか、そんな考え方にはあまり興味がわかりません。現に、家族というシステムが存在し、いろいろ言われつつ機能しているわけです。そのシステムの中で人が育っていくということを繰り返してきたわけです。良く出来たシステムだと思います。残ってきたものなら、上手く使っていったらよいと思います。もちろん、マイナーチェンジは必要かもしれません。でも、無くすよりはいい。自分の人生を振り返ってみても、ずいぶん恩恵を受けてきたと思います。仕事においても家族というシステムに焦点を当てながら、児童相談に携わってきました。

では、漫画『誰の虐待?』をご覧ください。

結婚をして子供が生まれた



三人目を妊娠した時、大変だろうとは思ったが、
夫も手伝ってくれるし、何とか
るだろうと思った



こうして夫婦と三人の就学前の子
達のにぎやかな生活が始まった



ある人の紹介で知り合って結婚



可愛いと思つたし、
二人目の出産も
自然に受け止めた



夫も私も、
それほど裕福では
なかったが、
普通の家庭で
育てられたと思う



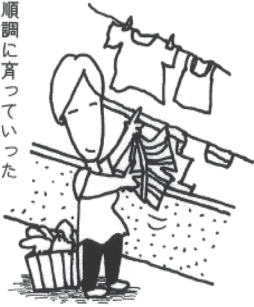
私も高校卒業後、衣料品の販売員
として働いていた



夫は高校卒業後、
大企業の工場勤務



子ども達も順調に育っていった



1年半以上もの間、彼は月に一度くらいしか帰宅できなくなった



彼は31歳、
私は26歳だったから
ごく普通だろう



変化が起きたのは、
夫に長期出張の指示が
あつてからだ



もし転勤だったら、どこだろうと
一緒に行つたと思う



生後半年の末子と
4歳、6歳の
子育てを
私が一人で
担うことになった



でも出張だったし、
住居も社宅だったから、
引っ越すわけには
いかなかった



そんな中で長男が小学校入学





でもそれは、学校に行ってしまう
ば元気で、授業にもついていって
いると
担任の
先生から
聞かされて
いたからだ

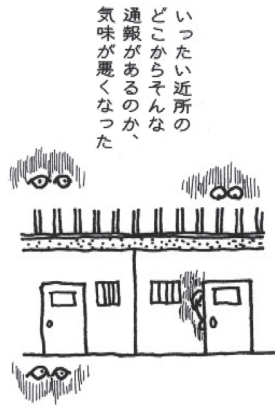


近所の住人から
児童虐待の通報が
あったのだという



しかししたまに帰宅した夫は、
疲れた顔で
「子育てはおまゑに
任せてあるのだから」
といった





児童虐待通報数
2万数千件などと
書かれている
新聞を見ると、
このうちの
2件は
私ののだなあ
と思う



そして世の中の
母親はみんな、
どうやって
こんな子育てを
一人で切り回して
いるのだろうか
と思った



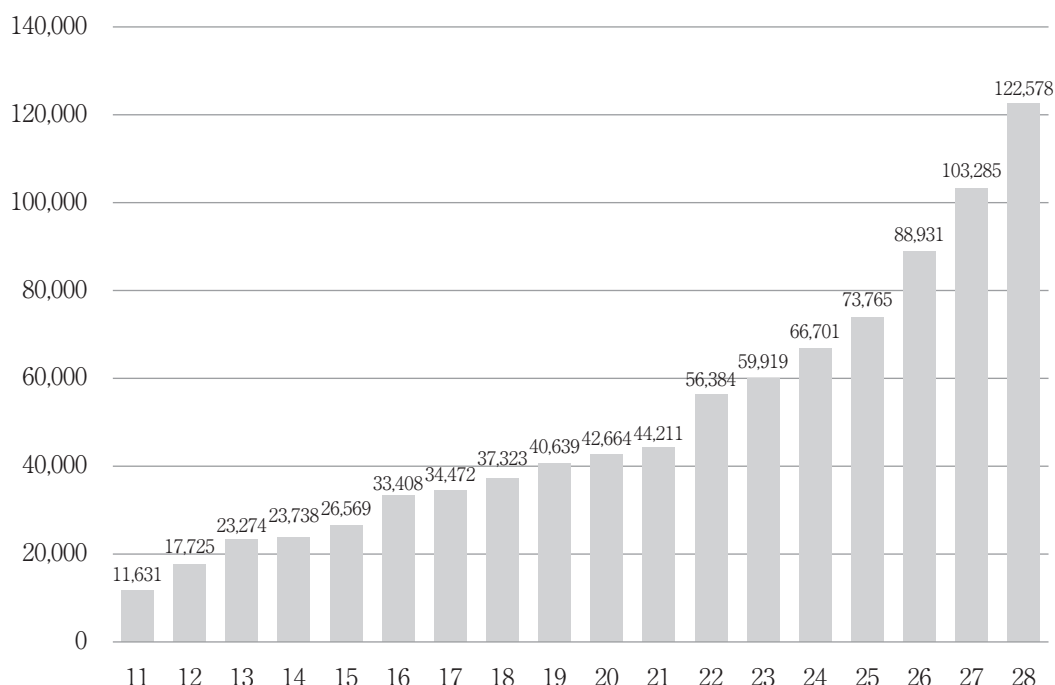
追い込んでおいて、
母親の
責任だなんて
言われていて、
だんだん
子供なんか
座みたくなくなつて
しまう人が
多くなるのも
わかる気がする

でも、これがどうして、
夫の職場の上司による
「私(母親)虐待」
じゃないのだろうか？



二万数千件の中にある、私と同じ
ような思いの母親達に、「みんな
勝手だよね!」と心の中で叫んで
いる





(厚生労働省統計より)

児童相談所の虐待対応件数の推移

(鑑賞後、参加者はペアになって、思った事を少し話し合ってみる。さらにその後、どんな話がでたのか参加者より発言をいただく。)

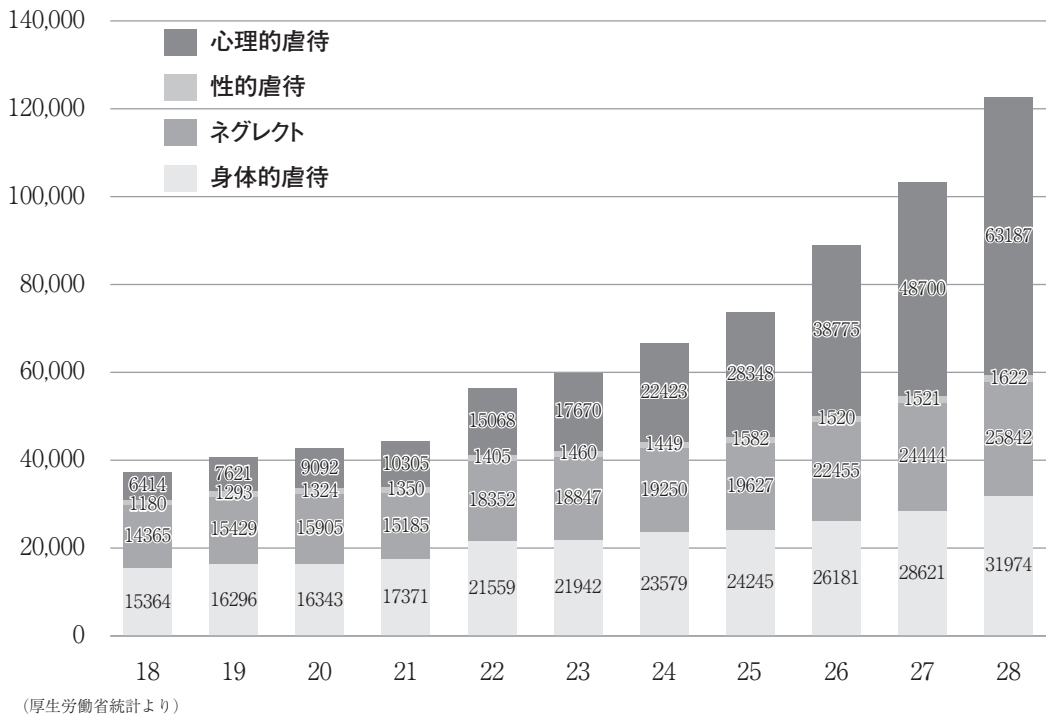
(参加者)

身近な知り合いの中にも、お父さんが長期出張とか、単身赴任とかという事で、1人で子育てしていらっしゃる方がいます。子育て真っ最中にそういう事が起こると、急な変化というのはやっぱりしんどいだろうなという感じました。それから、両親一緒にいても、子育てへの思いの違いの中で、結局、子どもに負担が出てしまっているお家もあるなと思いつつ見ていました。やはり家族は大切というのを、再確認しながら話をしていました。

(宮井)

ありがとうございました。やはり、子育てをする基盤があっても、なにか偶然の出来事でシステム自体が傾くことは十分起こりうることです。私がこの漫画を見て思ったのは、児童相談所(後は、児相と表記)ってところはなんてひどいところなんだということです(笑)。ただ、これは立ち位置

による見え方の違いということに大きな要因があるということだと思います。少し児相側からの言いわけをさせていただきます。漫画の中で児相から見えることを拾っていきます。最初の情報は、「子どもが泣いていて、お母さんらしき人がすごく怒っていて、子どもをドアの外に放り出しました」というものです。「お母さんが一人で一生懸命子育てしておられ、お父さんは単身赴任している。」これは後からわかる情報です。今の児相が最優先するのは「子どもの安心安全」です。ほんのちょっと前だったら、家庭内には警察でもあまり介入しなかった時代がありました。家庭の中には無闇に踏み込めないという意識がありました。確かに、この最初の情報だけでは家庭状況はわからない。後からの情報が分かれば、児相も安心するのですが、万が一ということを常に考えておかないといけないという児相の見方がある。先日、20数年前の事例を読み返す機会があったのですが、凄く控えめに言っても、この漫画の家庭状況などとは比べ物にならないほど、心配な情報が入ってきていたのですが、当時の児相や警察を含む関係機関は、「家庭内のことだから様子をみましょう」ということで、アクションを起こさな



児童相談所での虐待相談の内容別件数の推移

かったというものでした。その事例とこの漫画を比べても、随分変わったなと思いました。では、この漫画のように、お父さんの単身赴任という就労システム、なにかリスクがあればすぐに介入していくという児童福祉システム、それに乗っかるだけで普段は関心も示さない世間という社会システムで良しとするのかと言えば、多くの人は首を横に振ると思います。ただ言いたいのは、見え方や立ち位置によって物事は一変するという認識をどこかで常にとっておきたいということです。もう一つは、いくら育児に関する母親の負担が減ったとはいえ、漫画のように一人で抱えざるを得なくて辛い思いをされているお母さんは多いという事実です。

先程、漫画の中では虐待対応件数が2万数千件と言われていたのですが、「児童相談所の虐待対応件数の推移」のグラフ(p.72 上部参照)の平成15年度あたりの数字だと思われます。一方、平成28年度は12万2千件あります。これは病院や学校、警察、あるいは近隣から児相に通告があったものをまとめた数字です。12万という数字は感覚的には把握できない感じです。しかし、平成15年から平成28年の13年間に約4.5倍に膨れ上がっている

わけです。これは、日本の国内にこんなに虐待する親が増えたということでしょうか？イライラして暴力に走る日本人が増えたということでしょうか？そうではないですね。これは、世の中が、子どもとその家庭を見るときに、虐待というフィルターを用いるようになってきたということだと思います。見方＝認識の変化が進んだ結果と言えると思います。

「児童相談所での虐待相談の内容別件数の推移」のグラフ(p.73 上部参照)で平成28年度のところを見てみると、一番多いのが心理的虐待と言われるものです(63187件)。今は、旦那さんが奥さんを殴るような夫婦喧嘩(あるいは逆パターン)を子どもさんの目の前でしても、子どもに対しての心理的虐待ということになります。夫婦喧嘩もオチオチできんのかとお怒りになる方もいるでしょう。別に夫婦喧嘩はしてもよいと思います、しないに越したことはありませんが(笑)。困るのは、夫婦喧嘩の中でも、暴力が繰り返されるようないわゆるDV(ドメスティックバイオレンス)と言われるものです。それを、子どもさんが見ている。或いはその家庭に子どもさんが居るという事だけで、心理的虐待という言う風に命名します。お隣

りさんから警察に、どこそこの夫婦が凄い喧嘩をしているみたいな通報が入る。通報があれば警察は動きます。その家庭に子どもさんがいるという事実を把握したら、今度は警察から兄相に子どもに関しての虐待通告をしないといけないというふうに今はなっています。その分、これだけ心理的虐待の数字が跳ね上がっていると言えます。更なる認識の変化を迫られていると言えます。しかし、この漫画にあるように、家庭に向けられた監視の目はきつくなり、夫婦とりわけ養育負担の大きい母親は更に追い込まれる状況になっていることは容易に想像できます。

それから、常々思うことですが、「虐待」というネーミング選択の失敗というのを感じます。「虐待親」という響きは、ひどい鬼のような親を想像させがちです。現場に携わってきて、「親としてこの人どうしようもないな」という方に何人かは出会いました。しかし、「虐待をした親」のほとんどは、子育てに悩まれてもおられ、ちょっとしたボタンの掛け違いから暴力が始まってしまったという例がたくさんありました。はっきり言えることは、生まれてくる子を虐待しようと思って産む親はいないということです。「虐待」とは別にもう一つ「不適切な養育」というちょっと長ったらしいのですが、別の言い方があります。そっちの方がまだマシかなと思います。しかしながら「虐待」という言葉がこれほど世の中に流布されると、もう後戻りできないでしょう。キャンペーンの成功ではあります。でもそれで、すべてOKなのかというとそうではないことは明らかです。それはこの漫画の中のようなお母さんの憤りからも明らかです。同じような例は、保育所に子どもを預けたくても、抽選にもれてしまった母親のツイッターでのつぶやきからも拾い上げられます。

一つ言えることがあるとすれば、それぞれの立場に対しての想像力を持つという事でしょうか。漫画の中で、お母さんが「誰が言ったのか？」と疑心暗鬼になってますよね。法律的には通告する事が義務付けられてるから、結果的には正しい事をしているかもしれませんが、一人で頑張って子育てをするお母さんを追い込んでいる、決して助けにはなっていないように見える。もう少し何か、近隣(この漫画の場合は社宅ですから、全く知ら

ない関係ではない)、学校、あの親子の周辺の人たちで、通告以前に「お母さん、大丈夫？」って声をかけるぐらいのことはできるのではないかと思います。兄相に所属していた人間が言うのはおかしいかもしれませんが、何か通告の方に走ってしまっている現状があるように感じます。通告はしないとイケないですが、同時に「大丈夫？」という声かけをしてはイケないわけではない。子どもさんを預かる保育所や、子どもが通う学校であれば尚更のことです。それ以前の近所付き合いがあってイケないわけではない。児童相談所という所は、虐待通告があれば、子どもさんの安心安全を考えないとイケないから、スイッチが入ります。このように組織や社会システムとして虐待という事が発見される土壌というのは、子どもにとっては安心安全の一端ですが、家族や子育てをする人にとっては100%だとは言えません。子育てをしているお父さんお母さんには、楽ではない現実があること、養育におけるボタンのかけ違いであろうと、ひどい暴力であろうと、一概に「虐待」という言葉で一くくりにしてしまっている状況、「虐待」というネーミングには、監視するとか疑うとかいう意味合いが色濃く出てしまう危険性。こうした想像力を持ちながら、周囲が出来る事としては、「どうしたの？」という声かけかと思えます。一方でその声かけさえも簡単にできなくなってきている社会という現実に対しての想像力も含めて必要とされているという事です。とにかくこの漫画を通して考えることだけでも第一歩になると思います。

次に団さんの漫画の中から『さあ、もういっぺん』という子育てに関わる漫画をご用意しましたのでご覧ください。



でもそれは野球が
苦手なだけであることは、
バレーボールやスキーを
するようになって分かった。

音痴である。
小学校の通信簿、
音楽だけが
汚点だった。



運痴である。
野球がからつきし
駄目だったので
そう思った。



カラオケと出合っ
て歌うのが好きなことも分かった。

さあ、もういっぺん

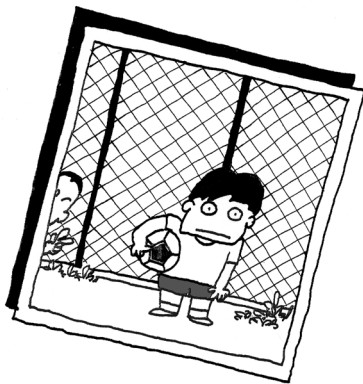
in the shade of family tree

木陰の物語

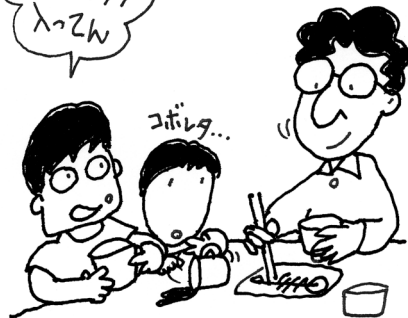


団 士郎

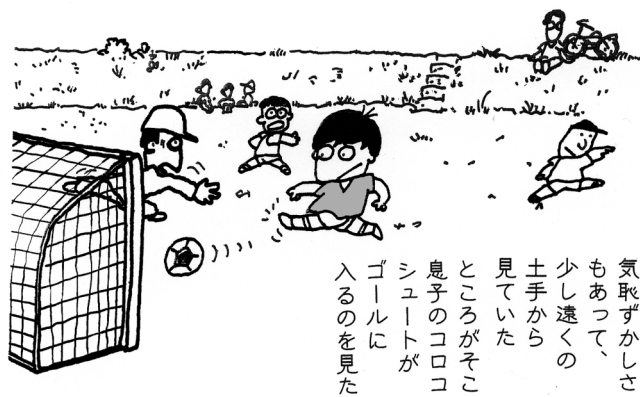
俺の子
やから
なら



サッカークラブ
入ってん



しかし何となく、潜在意識に
運動の苦手感が残っている。

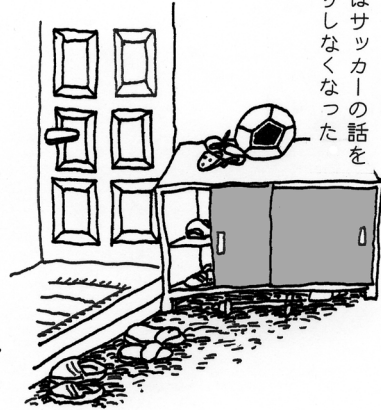


そんな時、
クラブチームの
ロゴ・マークを
考えてほしいと
頼まれた
ふたつ返事で
引き受けた



すごく興奮した
スポーツ選手の親は
こんな気持ち
なのかと 思った

ポップ・グリーンのコラムに



家ではサッカーの話を
あまりしなくなった



息子の出番は
少なくなっていた

私の描いた
ロゴ・マークの
旗だけが
揺れつづけた
(一)



しかし、それはまだ早すぎたので
はないか・・・
父親はそうつぶやく



「いずれ息子も
人には努力だ
けでは如何と
もしがたいも
のがあること
を知らねばならぬ日だ
ろう



凄く
頑張っ
ている
のに
レギュ
ラーに
は選
ばれな
い
野球
少年
の
息子
を見
守る
父親
の
話
が
あ
る

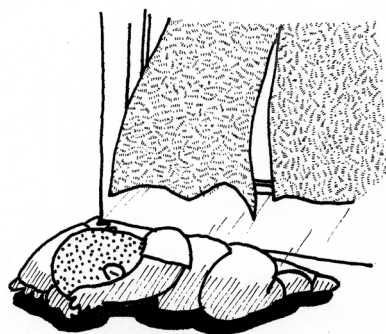
両親のよう
な
親がやれるのは
ホンの
一握りである



松阪や、
イチローの



ベンチで
応援する
息子のことを
考えながら、
親が
子どもの
すること
を見つめる
眼差しを思った



多分それが
親の仕事なのだろう

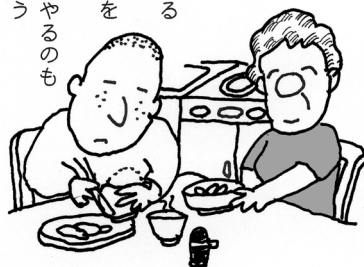


たいていの親は
こどもが
才能や運の限界を知って
挫折するのを見ることになる

親にとって
わが子だけは
何度でも
チャンスを持った
特別な
存在である



そして、
そこから始まる
人生に、
また夢や希望を
持つ力を
育てておいてやるのも
親の仕事だろう



そういう眼差しの
下でみんな
自分なりの何ものかに
なっていたのだと思う



Jリーグを
見ながら
今も時々思う
一番の
シュートは
なんだって
あれだ



そして
あれを見ることが
出来たことで、
私が親であることは
十分、報われているのだと思う



(鑑賞後、参加者はペアになって、思った事を少し話し合ってみる。さらにその後、どんな話がでたのか参加者より発言をいただく。)

(参加者)

実際の話、子どもが成長して、次の何か興味あるものになかなかいけない時に、どう支援してあげたらいいのかということを考えさせられた。これから、成長していくに連れて、考えていけないといけないなと強く感じました。

(参加者)

自分が子育てしている中では、きっと色々な挫折を繰り返していくであろう子どもを見守っていかないといけないんだと思うのと同時に、この漫画のお父さんは、能天気な時もあるけれど、子どもの存在自体を根っこで認めていることが、この子自身が、挫折してもまた立ち上がっていける力になっているのではないかなと思います。

(宮井)

本当におっしゃる通りだと感じます。ただ、実行するのは簡単ではない。漫画の中では、松坂が出てきましたが、今だったら大谷君あたりでしょうか(笑)。イチローは今でも現役であるのがすごいです。松坂も頑張ってますね。イチロー選手や大谷選手のような子どもの親になれるのはほんの一握りです。ほとんどは、大なり小なり挫折から再スタートする、そのイメージを持ってあげられることが必要だと漫画の中では描かれていました。別に挫折する事ばかり想定する必要はありません。イチローや大谷とはいかないまでの、そこそこ成功したら、それはそれで喜べたらすばらしい。ただ、挫折して、次にどうしたら良いのか探しあぐねる子どものバックボーンになってあげるのは、親の大きな仕事の一つだと思います。その分、漫画の中のコロコロシュートのような場面を見せてもらえることは親としての醍醐味と言えます。他人から見るとなんの感慨もないわけですけど、親からすれば、子どものコロコロシュートを目撃できることは、大袈裟でなく、一生の宝だと思います。

親に出来る事は、それほどなくて、「信頼」でできることぐらいではないかと考えます。この信頼というのは、あの有名な心理学者のアドラーさんが言っていたことらしいのですが、大阪のアドラー派のお医者さんの、野田俊作さんの著書からの受け売りです。親は子どもが何かやらかすと、「あんたの事、信頼してたのに」とはよく使う言い回しです。親がそういう時に使う「信頼」というのは本当の意味での「信頼」ではないということを書かれておられました。それは「信用」だということです。「あんたの事、信用してたのに」と言うのが正しい使い方だという事なのです。信用取引に代表されるように、相手がこちらの約束通りの事を履行しなかったら裏切られたと使う。この時はたしかに「信用」という言葉を使うのが正しい。一方、「信頼」というのは何があっても子どもがどうなっても、それは揺らがないわけです。子どもが育っていく過程においては良い事ばかり起こるわけではありません。子どもが事件に巻き込まれる、あるいは事件を起こす場合もある。その場合「信頼してたのに」とは、言わない。親子間おける信頼というのは、その事件自体では揺らぐものではないという意味で使いなさいと言っているわけです。もちろん、子どもの不始末について子ども自身が責任をとること、もし子どもが望むのであれば、親としてできることは手伝ってあげる事(子どもの年齢によってできることは当然違ってきますが)は当然かもしれません。ただそのことで信頼には基本傷はつかない。「信頼」とはそういう場合に使う言葉だと言っているわけです。覚悟がいるわけです。一見、綺麗事のように見えますけれども、こういう態度で子どもに接することは子どもにとっても大きな安心感を与えるという事でしょう。子どもの方も、親から本当の意味で「信頼」されるとうれしいですよ。結果、変なことはできない。「あなたがちゃんと裏切らなければあなたの事を信用しますよ」というのは、「裏切ったら親子の縁もそこまでよ」というメッセージでもあるわけです。親からの期待を裏切らないことが親子の条件という一種の契約事項かもしれません。親御さんは決して商取引をしようなどと考えているわけではありませんが、一方でそういうメッセージでも在りうる。「信頼」という言葉を使うのなら深い意味合いを持って使わ

ないといけないうと、子育てをしながら思った事があります。

親というのは能天気なもので、自分の都合の良い方に考えがちです。大谷やイチローになった子どもの姿をまず思い浮かべます。子どもが野球を始めたら、子どもが甲子園球児になった姿を思い浮かべます。いじめという言葉を知ったら、我が子がいじめられてはいやしまいかと心配しても、もしかしていじめる側になっていないかとはあまり想像しません。親として、想像力は持つべきです。いじめは起こりうること、その時、我が子はいじめられる側ではなく、いじめる側に立つ可能性もあることも想像できること、それが親の仕事の一環ではないでしょうか。その上で子どものことを信頼して、いじめていたとしたら親としてはショックで悲しかったことを我が子に伝え、謝りに行くのなら付き合うよというような事が親としてできたらいいし、それぐらいの事しかできない。その上で、信頼は揺らがない。そんな親子関係を持てたらいいというのは親子関係における自分の理想でもあります。

そしてまさに、私が「さあ、もういっぺん」という漫画を観た時に思ったことが、アドラーのいう「信頼」という言葉の使い方と共通する感覚でした。子どもが立派に税金の払える大人に成長することや、子どもから有形無形の親孝行を受けること(そりゃ、温泉にでも連れて行ってもらったら正直うれしいですが)を望まないとは言いませんが、その親だけにとってのコロコロシュートを一生に一回見せてもらえれば、親としてそれで終了としてよろしいのではないかと思います。それ以上でもそれ以下でもない至極の瞬間であると思います。少し大げさに言えばそういうことです。

今日は児童相談の現場から見た家族や子育てにまつわる話をさせていただきました。今日のテーマとなった漫画は、「一家族の練習問題―木陰の物語」という題名でシリーズ化され出版されます。興味のある方は、ぜひ本屋さんやアマゾンで、ポチッとして取り寄せてみてください。ユーチューブでも一部見られます。最後になりましたが、児童相談所という所は、虐待に関する相談だけを行っているのではなくて、障害や養育に関わる相談もおこなっているという事をお伝えして講演会を終わりたいと思います。ご清聴どうもあり

がとうございました。

國士郎氏のコメント

京都橘大学の宮井先生の講演について、コメントを求められました。私の漫画作品、「家族の練習問題」からふたつのお話を取り上げて話していただいたとのこと。漫画を描くことと、家族心理臨床、家族療法と呼ばれる世界で仕事をしていることのつながりなどを考えながら、少し述べてみたいと思います。

子育て中の親は、善良なところがたくさんあって、間違いもおかしますが、あれやこれやと後悔したり反省したりしています。けっして失敗してやろうと思って、何かしているわけではありません。

上手くいくことばかりを求めすぎると、そんな事は特別な人にしかできないという結論になってしまいます。現実にはその傾向はなきにしもあらずで、自信がないから子どもなんか産めないという言い方は聞かなくもないです。それだけが理由ではありませんが、少子化問題を世間が言い出したのと、虐待通報がドンドン増えていった時代が重なっています。

自信のある人だけが子どもを産んで育てるなんて、少し前までは誰も考えませんでした。たくさん子どもを産んで、何人かは戦争で亡くしている明治、大正、戦前のお母さん。この人達が誰も、それぐらいの事で心は傷つかなかったと、決めつけるのは顔けません。だったら、傷ついて立ち直れなかったかということそんなことはありません。他の兄弟姉妹達の世話に、生活に、引き続き奮闘して生きたのです。

一方、一人か二人を産んで大事に育てて今に至る戦後のお母さん。子育てに悩み、子どもの心がわからないと、自分を責めたり、混乱したりします。この両者は全く異なった世界の人などではありません。日本社会のお母さんなのです。

では何が違っているのでしょうか？ズバリ、時代が違うのです。社会が共通して理解する子育てや家族のイメージが変わったのです。ある時代までしつけだと皆が言っていたことが、いつの頃からか体罰だということになりました。ハラスメン

トの話なんかも同様です。

無論、それによって人々が暮らしやすくなったり、誰もが安心できる世の中になるならそれは良いことです。しかしそんな都合のいいことばかりが起こる社会をわれわれは作れません。

ルールが多くて息苦しかったり、あまりにも表面的なことばかり言っていると、裏世界の闇がどんどん深くなっていったりする。そんな事は歴史を振り返れば何度もあったことです。

みんながうまく暮らしていく、でもそこには多様性が確保されていなければなりません。こうでなければならない、こうあるべき、などということが膨らみすぎない社会を作っていくことが私たちの賢さです。

誰も彼もが必死になって、子どもを煽り立てて進学塾にやったり、近所の人々が苦勞しているのを見て、そっと虐待だと匿名通報したりする、そんなことが進歩した社会の子育てだとは思えません。

家族や子育てを息長く続けてゆくには、人としての知恵がたくさん必要です。それはみんな、経験して学んで、積み重ねていくのです。あなたの家の子育ての答えを、どこかの専門家が知っているわけではないのです。

文 献

団士郎(2006). 家族の練習問題 1～7 巻 「誰の虐待」、「さあ、もういっぺん」の2編は1巻に所収 本ブロック出版社.

野田俊作(1991). 続アドラー心理学トーキングセミナー—勇気づけの家族コミュニケーション アニマ 2001.